

博士論文（要約）

論文題目      メディアの超克—複製技術時代の近代日本

氏    名    林   三博

一九世紀末、外国として実体化された外なる〈近代〉に抗すべく近代日本が立ちあがってきた。それは、「想像されたもの」としての近代国家の外貌が〈近代〉とは異質な秩序と並立していく過程の始まりでもあったといえる。その秩序とは、年代記的な時間を持たず、また日本として名指すことさえできないような、つねに消滅の危機にも晒されつつ出来事の連鎖のなかで再生産されていく何かであった。近代化の足がかりとなった開国とは、近代日本がその秩序のなかで閉じていくことの契機だったといえる。そのため、未だに近代日本は、一方で整然とした近代の外貌を備えているゆえにあまりにも語りやすく、他方でその近代が外貌であるゆえにあまりにも語りにくい何かであり続けている。

本論で検討したのは、近代日本の技術環境のうちに刻まれたこの二重構造の系譜である。身体と身体の交感的接触を断ち切ってしまうメディアの働きは、〈近代〉が技術の作用として実体化されたものであったといえる。しかし、それゆえに近代日本にとって、外国という外なる〈近代〉に対抗する近代化としての技術移植を推し進めつつも同時にメディアという内なる〈近代〉を遮断することが課題となった。そして、近代日本の国家政治のもとで、身体感覚としての《日本》が、メディアとなることを放棄した複製技術の交感的作用を介して、各時代の技術環境の発達に取り憑きつつ繰り返し生起してきたのである。

本論は、こうした系譜を言説の厚みに即して歴史的に検討した。これは、第一に、近代日本にとって近代が外貌にとどまっていたことをみきわめるうえで、第二に、《日本》の顕現形態の変化を捉えるうえで有効であると考えられるからである。

第一章では、〈近代〉とは異質な秩序が明治以前においていかなる形態をもって顕現し、それがいかに明治以降の技術環境のもとで再編され、かつ近代日本のナショナリズムに組み込まれていったのかを検討した。とくに、明治以降の近代天皇制のなかで、天皇の身体とそれを中心として整序された事物、およびそれらに連なっていた複製技術による《日本》の表出に注目した。明治以前における事物への愛着を継承するかたちで、近代日本において皇統という生命のサイクルや事物の連鎖を宛先とする身体感覚としての《日本》が生成し、そこに、原物の唯一無二の存在感を複製する、明治以降に導入された技術の働きが組み込まれていったのである。〈近代〉とは隔てられた秩序のなかで近代化としての技術の移植が進められていったといえる。

だが、大正以降、近代日本が近代としての自意識、あるいは自意識という近代的なものを肥大化させるなか、複製技術は意味を媒介するメディアであろうとし、他方で感応的身体はメディアを理解する人間であろうとしていく。以下の第二・三・四章では、第一章で確認した《日本》が大正以降の技術環境の激変期においても再生産されていくなか、その顕現形態がいかに変化していったのかを検討した。大正以降、近代の外貌がこの国、この国の人々の自意識として拡大するとともに、それと親和的な複製技術（出版物、写真、映画、ラジオなど）が普及するが、これは〈近代〉の成立ではなく、それが未成立なままで複製技術がメディアとなろうとしたことを意味した。

第二章では、活字メディアが《日本》を思想によって表現しようとする過程での、メディア化した複製技術と《日本》との衝突を、大正以降に登場した「日本精神」に注目しつつ検討した。とくに、活字メディアが〈近代〉から隔てられたまま強迫的に思想形成を志向していった結果、思想がみせた壊乱性に注目した。メディアの「誕生」において《日本》が書物の言葉を通じて表現されるようになり、複製技術がメディアであろうとすると同時にそれを拒絶するという自己否定の構造を抱え込んでいったのである。感応的身体も、文字面を追う読者となろうとしたにもかかわらず、いまだ彼らはその文字面に意味にとどまらぬ何かを感得していったといえる。

第三章では、視覚メディアが《日本》を文化によって表現しようとする過程での、同様の衝突を、やはり大正以降に登場した「日本的なもの」に注目しつつ検討した。ここでもまた、視覚メディアが、強迫的に日本文化を求めていった結果に目をむけるが、とくに思想にみられた壊乱性の感覚的な表れに注目した。近代化が二〇世紀前半の技術環境全体を取り囲むなかで、書物の言葉にみられる自己否定の構造が、建築・美術から視覚メディアまで《日本》の表現の様々な局面において反復されていったのである。

第四章では、昭和一〇年代半ば戦時体制下において、第二・三章で検討した衝突が臨界に達することで近代の外貌が剥離し、《日本》が大正以降の技術環境のなかで再編されていく様子を検討した。とくに、戦意昂揚映画が内部に宿すダイナミズムがアジア太平洋戦争における現実の生成に同調していく様子に

注目した。太平洋戦争開戦以降、複製技術がかってメディアとなろうとしたのと同じ振幅でメディアであることから撤退していったのである。そして、敵国として実体化された〈近代〉との戦闘の最中であって、そのこと自体が〈近代〉との闘争としての意義を持つようになっていった。

第五章では、皇統という中心を失った《日本》が、昭和三〇年代以降に再び訪れた技術環境の変容（サイバネティックス技術、電子メディアなど）のなかでその顕現形態をいかに変化させたのかを検討した。これもまた〈近代〉が未成立なままでそうした技術環境が拡大してしまったことを意味するが、とくに、それが、情報化社会という後期近代の外貌と《日本》との衝突ではなく両者の親和的關係であったことに注目した。もはや日本の歴史的同一性が皇統に仮託されえなくなるなか、複製技術自体の内側に生成する時間感覚がそれを受け継いでいく様子を検討した。すなわち、感応的身体は、皇統から切り離された、テレビそれ自体の永久不変の視聴覚的な流れに身をまかせ、そこに日本人としての生をみいだしていったといえる。